■あなたの袖は、右?左?

西都原古墳群でいえば4号地下式横穴墓、鬼の窟古墳、酒元の上横穴墓など、遺体を埋葬す る「玄室」へ横方向から入るものを考古学研究者はこう呼んでいる。

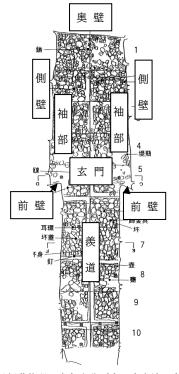
この横穴系埋葬施設を平面で見たとき、羨道(玄室への通路)と玄室が接合する部分(玄門) から左右に伸びる壁(前壁)とそこにつながる側面の壁(側壁)で形成する部分を補部という。 埋葬施設の平面形を、羨道側を脚部方向とした人間が着る上着に見立てた場合の袖にあたると いう訳だが、この衣服を着た人はうつ伏せなのか?仰向けなのか?

うつ伏せであれば、玄門から奥壁(玄室の突き当たりの壁)を見て右側が右手の、左側が左 手の袖、仰向けならばその逆ということになる。

では、研究者は左右をどのように呼び分けているのだろうか?

実は、これははっきりと定義づけられてはいない。

石室内に入るとき、大概の人は奥壁側に向かって入るので、その時の左右で「右袖」「左袖」 を区別(つまり、うつ伏せ状態)すればいいという人もいれば、羨道側からは袖部は見えない のだから、奥壁側から羨道側を見たときの方向で区別すべき(つまり、仰向け状態)と主張す る人もいる。







横穴系埋葬施設の各部名称(鬼の窟古墳石室平面) 鬼の窟古墳石室(玄門側から奥壁をみる) 鬼の窟古墳石室(奥壁側から玄門をみる)

東京国立博物館の河野一隆氏は、畿内の初期の横穴式石室に奥壁に向かって左側にだけ袖部がある石室が多いことを中国南朝から百済を通じた流れの中で「右片袖の思想」という言葉で論じられている(河野一隆 2012)。私の恩師の柳澤一男氏は、単純に羨道から奥壁を見て右なら「右袖」、左なら「左袖」でいいと仰っており、自分はその言に従っている。

このように、研究者によって左右の区別はまちまちなのが実情だ。

横穴系埋葬施設には、ノースリーブの「無袖」のものや、一方にしか袖がない「片袖」のものも多くあり、その場合は問題が生じないのだが、両袖のものは左右がはっきりしないと、構造や副葬品の出土位置を示すときなどに混乱を来すことになる。

「どっちでも構わない」では済まないのである。

そのため、凡例や注に各部名称を図示するか、どちらが左右かを明記するという一手間がかかる。そうしないと、それぞれの説明のたびに、いちいち「玄室から奥壁をみて右の袖部」だの「玄室内から羨道方向をみて左側の袖部」などと、単に「右袖」、「左袖」と書く何倍もの文字数を使わなければならなり、文章的にも非常に煩雑でわかりにくいからだ。

ならば、学術用語としてしっかり共通認識が持てるように定義づけすればいいじゃないかと 言われるかもしれないが、残念ながら、そんなめんどうな作業をやりたがる考古学者は、現状 存在しないのだ。

こういった事例は横穴系埋葬施設に限ったことではないので、「考古学」という学問が、非常にいい加減、よく言えば大らかな学問であることを示す一例といえるのかもしれない。

西都原を訪れ、4号地下式横穴墓や鬼の窟古墳を見学し、小難しい説明文を読むとき、この文章は実は非常にいい加減…いや、大らかな学問の結実なのだと思いを巡らせば、構えず楽しく読むことができるのではないだろうか。 (和田 理啓)

【参考文献】

河野一隆 2012「倭王権から倭国へ—雄略朝の画期の評価を中心として」『講座日本の考古学』8 古墳時 代 下,青木書店

宮崎県教育委員会 2000『鬼の窟古墳 西都原 205 号墳』特別史跡 西都原古墳群発掘調査報告書 第1集